

博士學位論文要約

論文題目： 中日近代文学における留学生表象——二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に——

氏名： 林 麗婷

要約：

本研究は二〇世紀前半期の中国人日本留学生を中心に、中日近代文学における留学生表象を明らかにしたものである。日清戦争後、中国人の日本留学が始まった。それに伴い、文学において留学生がしばしば登場する。先行研究では、二〇世紀の中日関係を踏まえ、留学生をナショナリズムと絡めて論じられることが多い。しかし、本研究で明らかにしたように、留学生小説では、国民意識が芽生えつつも従来の大中華意識を温存する留学生もいれば、愛国と享楽の間に揺れる留学生もいる。また、留学生の間の葛藤や留学生と自国との齟齬を描く小説もある。さらに書き手の問題であるが、中国人作家の作品を取り上げた先行研究がある一方、日本人作家の手による留学生小説は殆んど論じられていない。中国にとっての他者が留学生をどのように描き出すかは実に興味深い問題である。

以上を踏まえ、本研究はナショナリズムの問題を念頭におきつつ、「愛国」の裏にさまざまな問題を抱える留学生の表象について論じた。書き手の留学経験を問わず、留学生が表象される作品を対象にした。具体的には、二部の構成で、六篇の小説を扱った。章構成は次の通りである。

序章 中日近代文学における留学生表象——二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に——

第一部 中国近代文学における留学生表象

第一章 賈宝玉、日本へ行く——南武野蛮『新石頭記』を読む——

第二章 余計者としての「留学生」——張資平「一班冗員的生活」を中心に——

第三章 「摩登モダンガール」としての中国人女子留学生——崔万秋『新路』を読む——

第二部 日本近代文学における留学生表象

第四章 想像としての「アジアの子」——佐藤春夫「アジアの子」試論——

第五章 「親和」と留学生——太宰治『惜別』を中心に——

第六章 幻になった留学——大城立裕『朝、上海に立ちつくす』をめぐって——

終章 留学生小説の可能性

次に、各章の要約をまとめる。

第一章では、南部野蛮『新石頭記』を通して、明治末期の日本留学がいかに表象されたかを考察した。『新石頭記』は古典小説『紅樓夢』の続篇の形を採っており、主人公賈宝玉が近代にタイムスリップし、上海で見聞を広げ、さらに日本へ留学するという話である。一見して奇抜な小説であるが、賈宝玉の日本留学を考察することによって、当時の日本留

学がいかにかに語られるかが見えてきた。

第一節では、作中描写から作中時間が二〇世紀最初の一〇年の半ばに設定されていることを確認した上で、清末に流布した各種の日本留学案内書と対照しながら、本作と現実との関わりを明らかにした。宝玉の渡日のルートや上陸後の経験は同時代の留学生案内と相通じるところが多く、読者にリアリティを感じさせる。

第二節では、宝玉の渡日の過程や途中の見聞、勸業場への見学などを検討した。宝玉は上海で新聞を読んだことや当時のインテリゲンチヤとの交流を通じて、「国民国家」に対する想像を膨らませる。宝玉の渡日は当時の中国知識人の日本体験を「再現する」ものであり、「文明」に対する「追体験」である。また、黛玉の人物造形についても分析を試みた。黛玉の造形は清末に「女学」が興ったことと関わっている。留学経験があり西洋の知識を備え、詩文をやめ、翻訳に没頭している黛玉は新時代が求める理想の女性である。

第三節では、同時代の作品、『苦学生』、『傷心人語』と『東京夢』と対照しながら、『新石頭記』における日本人の中国人へ投げかけるまなざしの問題について議論した。『傷心人語』と『東京夢』では、「文明」日本と対照的に、中国人の「不衛生」さ、「野蛮」さは前面に押し出されている。日本人のまなざしも、また厳しいものである。『苦学生』や『新石頭記』では、日本は「文明」化を遂げながらも、清国と良好な関係を築いていけそうに見える。特に『新石頭記』における天皇に対する描写から、作者の大中華意識が読み取れる。

『新石頭記』では、宝玉は留学し、黛玉との結婚を遂げるのみならず、清国の発展に寄与する人物のように造形される。清末の留学ブームの一側面が反映され、知識人の近代、「文明」日本を経験したありようが浮き彫りにされている点で、本作は評価に値する作品なのである。

第二章では、張資平「一班冗員的生活」を中心に、大正時代の留学生の社会的立場が小説においてどのように表象されているのかを論じている。

第一節では、小説の時代背景——日本政府の「対華 21 カ条」(1915) および「中日軍事協約」(1918) などに反対するために起きた留学生の反日愛国運動、留学費用の増額運動——と、作品に登場する留学生の形象との関連性を明らかにした。

第二節では、同時代の文脈を踏まえつつ、「冗員」の意味合いを分析した。作品では、留学生の素行不良を特筆するが、現実では、留日学生が中国国内教育の発展、米国への留学生の増加などによって、社会的地位を低下させていく。張資平はこのような変化を敏感に捉えて、「冗員」という言葉を以て余計者としての「留学生」を描き出したのである。

第三節では、登場人物 C の言動に絞って、「冗員」の裏にある留学生同士の葛藤、留学生と中国政府との齟齬を論じた。C は中国政府内部の軍閥闘争などに苦しんでいるし、ほかの留学生が熱中している活動にも冷ややかなまなざしを投げかける。日本において、C はもちろんマイノリティーであるが、留学生集団に対してもまた、疎外感を持つ人物として描かれるのである。

第四節では、初期創造社同人の小説との比較を通して、本作の独自性を考察した。具体的には、留学生を表象するにあたって、郁達夫や鄭伯奇などは留学生と他者（日本）との問題に重点を置くが、張は留学生内部及び留学生と自国との問題を扱うという独自性がある。

最後に、本作以外の張の初期小説における留学生の表象にも目を配り、作家の問題意識を論じた。張は「冗員」という言葉で中華民国にとって余計者となった留学生を描き、それら「冗員」同士の諸相を表象することで、中国内部の一括りにはできない社会状況を浮かび上がらせ、留学生及び中国政府両方に批判のまなざしを投げかけた。同時代の「問題小説」と共通しているテーマを指摘できよう。

留学生の置かれた立場の歴史的背景を具体的に考察することによって、中華民国以来、「中国」への強い帰属意識を持つ者として表出された留学生像を更新したのである。

第三章では、崔万秋の小説『新路』を扱った。従来の研究では、留学生の満洲事変以降の活動が注目され、「恋愛」と「革命」の関係や、「啓蒙より救国」というモチーフが指摘されてきた。一方、作品では、留学生の日常生活や感情の葛藤が細かく描かれ、特に女子留学生のあり方が読者の目を引く。そこで、本章では、女子留学生の活動を中心に、1930年代の中国人女子留学生表象を考察した。

第一節では、中国人女性の日本留学史、及び昭和初期の概況について確認した上で、当時の女子留学生に関する新聞報道について調べた。昭和初期の中国人女子日本留学生は、人数としては留学生全体のごくわずかにすぎないものの、広く官私立大学、女子専門学校などに在籍していた。彼女たちは中国で中等以上の教育を受け、日本で医学や法律、政治など高等教育を勉強していた。また、女子留学生に対して中日両国はいずれも比較的好意的な視線を送っていた。とりわけ日本側の記事は、女子留学生が高く評価されていることが窺える。

第二節では、小説における女子留学生の外見、住まい、活動などに対して分析を行い、モダンガールとして表象された女子留学生のあり方を指摘した。彼女たちは「近代的」な顔をし、「摩登哥兒」と呼ばれ、ダンスなどモダンな生活を享受している。モダンガールとしての女子留学生の有する意味を考えるには、女性作家凌叔華の散文「登富士山」を引き合いに出した。「登富士山」では、「私」（中国人女性）は日本人下女のまなざしに抵抗感を覚えるが、『新路』では、女子留学生は日本人女性の羨望の的になる。作中の女子留学生が、上海の女学生／モダンガールのイメージを彷彿とさせながら、東京（日本）を見返す存在となって描かれている点は、非常に興味深い。

第三節では、満洲事変後のモダンガールの行方を追うことで、作者の意図を検討し、『新路』の文学的意味を検討した。「連載予告」を見ると、作者は確かに女子留学生の抗日救国活動を描こうとしていた。しかし、小説には「愛国」からずれている部分があり、作者のモダンガールに対するアンビバレンスも読み取れる。モダンガールの日本に投げかけるまなざしにおいては、東京より先進的な都市として上海が位置付けられており、そこには東京（日本）と上海（中国）の力関係にアンチテーゼを提出しようとしていた作者の企図が潜んでいるとも考えられる。

満洲事変後、「愛国」が求められ、結局モダンガールはテキストから消えるが、実際に『新路』を読み進めれば、リアリティをもって読めるのは、女子留学生たちの生態、中でもそのモダンなライフスタイル、三角恋愛を含む恋愛の数々である。『新路』を通して、享楽と愛国の間に立っていた、一九三〇年代の中国人女子留学生の多様な姿を、現在の我々は読み解くことができるのである。

第二部では、日本人作家の手による留学生像を検討した。盧溝橋事件の後、中国文学における留学生小説が少なくなる。一方、日本文学において、留学生が登場するものは増える。第四章では、佐藤春夫「アジアの子」を考察した。郭沫若の日本脱出に対する日本知識人の反応を確認したうえで、盧溝橋事件によって起こった中国人留学生の帰国がどのように理解された／されようとしたのかを明らかにした。そして留学生の日本での活動を踏まえ、作品分析を通して佐藤の中国知識人／留学生に対する想像力について検討した。

第一節では、中国知識人郭沫若の帰国に対する日本マスメディア・文壇の反応を確認した。郭沫若の日本脱出は日本社会を驚かせながら、「忘恩」などの批判を浴びた。しかし、郭沫若に言わせれば、日本の「愛国教育」を受けたからこそ、中国人が「侮日抗日」の者に生まれ変わったのである。そこから、日本側が留学生に寄せる期待および現実とのずれが露呈してしまったのである。

第二節では、留学生が中国の近代化を目指して、積極的に日本の先進技術や社会制度を中国に紹介してきたが、日本の対中侵略につれて、だんだん「反日」になり、盧溝橋事件後一斉帰国を果たしたことを振り返った。その背景下、郭沫若の帰国も自然な成り行きになるが、「親日派」の代表格と見られていただけに日本文壇に衝撃を与えたことを指摘した。

第三節では、作品分析を行ったうえで、佐藤春夫の文章を引用し、留学生を日本の文化進出の担い手として想像していた彼の考えを明らかにした。

第四節では、倉田百三の戯曲「東洋平和の恋」に描かれる留学生を引き合いに出して、留学生が「日支融合」を語る時の困難を指摘した。

留学生は日本文化の輸出の担い手になる反面、「愛国心」によって「侮日反日」の道に走る危険性も孕んでいる。佐藤は「アジアの子」でそういう他者性の問題を見落とすのである。ただ、佐藤の考えは個人のものというより、むしろ日本政府の当時およびその後の対中政策と共通したものである。

第五章では、太宰治『惜別』を考察の対象とした。『惜別』は「大東亜共同宣言」の中の「独立親和」原則を小説化する国策小説であり、太宰の時局への協力と抵抗問題をめぐり議論されてきたが、本章では太平洋戦争期以降における日本の留学生政策と大東亜共栄圏との関係を踏まえて、本作の批評性を論じた。

第一節では、留学生に関する新聞記事を整理し、太平洋戦争期以降、大日本帝国は留学生を大東亜共栄圏建設の柱に位置づけようとし、留学生と日本人との「親和」物語を求めている事実を確認した。そのの背景下、『惜別』が執筆されたわけである。

第二節では、『惜別』における周さんの造形を分析し、太宰の描き方から周さんを明治末期の大勢いる留学生の一員として位置付けた意味を検討した。一旦所謂日本の「忠の一元論」に惹かれたものの、だんだん日本人と疎遠になり、最終的に中国自らの論理を信じるようになり、日本を去ってゆく周さんのありようを浮かび上がらせた。

第三節では、津田憲治という登場人物の言動を分析し、いつも「国」や「政府」を口にする彼が日本政府そのものを隠喩していることを明らかにした。津田の介入によって周さんと「私」との親和にひびが入る。

戦時下、留学生と日本との「親和」が求められる背景で、太宰は明治末の親和物語の破

綻を描いて、戦時下の「独立親和」のパロディーを作ったのである。国策小説とはいえ、読み直す価値がある作品である。

第六章では、大城立裕『朝、上海に立ちつくす』を扱った。これまで検討してきた作品と異なり、本作は沖縄出身の青年知名の太平洋戦争期、東亜同文書院（以下は同文書院と略す）での留学経験を綴る物語である。

第一節では、中日両国の同文書院に対する評価を押さえた上で、新聞記事を通して、第二次世界大戦中、同文書院が戦争に加担した事実を確認した。その上で、作者大城立裕が本作を執筆する意図は、同文書院の戦時下におけるあり方を見つめることにありと指摘した。

第二節では、主人公知名の留学経験に絞って論じた。軍米収買や勤労働員などの経験を通じて、同文書院に不信感を感じるようになり、自分の居場所に懐疑を抱くようになる知名のありかたを明らかにした。特に、作者は言葉と暴力との関係を描くことによって、書院生のジレンマを描き出している。

第三節では、同文書院をめぐる書院生の議論を検討して、作者が同文書院を、「日中共栄」のための機関でありながらその虚偽性を顕在化させるものとして描き出したことを指摘した。知名が同文書院の真相を知りゆく過程は、同時に大日本帝国国民としてのアイデンティティーから解放される過程でもあると読み取れるのである。

大城立裕は戦時下中国にいた日本留学生のあり方を通して、「日中共栄」の虚偽を暴き出し、同文書院の戦時下のあり方を批判したのである。

異国に滞在する留学生にとって、他者との接し方は避けて通れない課題である。留学生は日本をどのように理解しようとしたか、また留学生はどのように理解されようとしたか。本研究では、二つの方向から、中日近代文学における留学生像を探ってきた。以上六章の考察によって、異なる時代における留学生の諸相が解明されて、「愛国青年」で一括りにはできない留学生像を明らかにした。文学作品が取り巻かれた時代状況への検証やテキスト分析を通して、留学生自身が抱えた問題や自国との関係、留学生の置かれた環境の変化、日本という他者から／へのまなざしが小説で読み取れ、留学生が日本に抱えたアンビバレンスが浮上したのである。留学生をテーマにそれらの小説を読み解くことによって、中日近代交流史の新たな一側面が垣間見えるのである。

参考文献

日本語文献

実藤恵秀『中国人留学史』（一九六〇年三月二〇日、くろしお出版）

巖安生『日本留学精神史』（一九九一年一〇月一日、岩波書店）

周一川『中国人女性の日本留学史研究』（二〇〇〇年二月二四日、国書刊行会）

中国語文献

王徳威『小説中国：晚清到当代的中文小説』（一九九三年六月一日、麦田出版）

朱美祿『域外之鏡中的留学生形象——以現代留日作家的創作為考察中心——』（二〇一一年九月、巴蜀書社）